

智慧の投影

今道, 友信

<https://doi.org/10.15017/2328775>

出版情報 : 哲學年報. 22, pp.253-265, 1960-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

智慧の投影

今道友信

一、植物園に於ける序章

「我が民、木にむかいて事をと⁽¹⁾。」とホセアは異教の樹木崇拜に汚されてゆく民を責めながらも、「我れは蒼翠の杉のごとし。」⁽²⁾というヤハウエの言葉を伝えている。天そそり立つ木を見ることは、花の色香の遠く及びぬ垂直の気品、常識の射程の彼方に結晶している神の気を想わす。高貴な智慧が樹に譬えられようとするとき、我々は系統づけられた植物園の遊歩道のまひるまに立っていた。(もう既に、石柱の森の冷えた翳の幽けさの中に煌めく葉洩れ日の朝影は、記念碑の中に数えられている。)⁽³⁾近世はそういう白日の植物園を幾つ設計したことであろう。すぐろに伸びてゆく筈の樹が、色々の山林から運びこまれている。智慧を尊ぶ人類のあこがれの象^{かたち}であった。遊歩道にいと、それらの木々が落とす影がよく見える。木々は石程に一律ではなかった代りに、根ばかり下ろして表情も疲かれ、枝を水平に匍わせた影が多かった。それは老衰現象であろう。日本の造園技師はその対策として計量性の使用を企てた。一切の樹木には定年制が施行せられる。これは一見、甚だ賢明である。こうすれば、マイヤーがヴェルツブルグの植

物園を荒廃させたのを防げたかも知れなかったが、その代り、クリングナーもヴィラモヴィッツ・メレンドルフを仰ぎ見えなかったかも知れない。それはまた、一見、甚だ公平である。だが、老衰現象はこの場合生理的年齢の問題ではなく、全く精神のことである。もと計量を超えるものではないか。ヘルダーリンは既に壮年にして薄暮の中へ衰えてゆく。質の判定の不可能を宣言し、量を以て規準とするという謙遜な植物園が大学に等置せられようとするとき、我々はソクラテスの愚かしい言葉が本当になっているのを発見する。もはや、「樹木は私を教えはしない。」⁽⁴⁾

とにかく、田辺重三は六十三を生きたがゆえに、九州大学から追放せられた。それは一九五九年三月のことである。彼の革ジャンパーと下駄履きの講義姿は私の最も忌む所であった。だが、その哲学的精神は、日本の現代の哲学者の中では、故人となつた西田幾多郎、池上鎌三のそれとともに、或いは恐らくそれ以上に、私の尊敬して止まない高邁鋭利な冴え方である。人間の温かさと論理の苛酷を兼ねそなえた奇妙な風貌には、既に一つの品格があつて、独房生活のごときその研究室には、九州大学の心の故郷の雰囲気があつた。その深い味わいの形而上学的な講義も、謙虚と自信の共存する談論風発も、今ここでは人々の記憶に生き、たとい導きの力を果たしていようと、現に触れるわけにはゆかない。まして、その人は書くことには怠惰な程不精であつて、一冊の著書も今の所はないし、現われる気配もない。それはケーベルの伝統でもあろうか、伊藤吉之助もそれに類して筆を執る所稀であつたが、田辺重三に於いては、そのことがまさにソクラテスに通う筋金でもあつた。自らを敢えてプラトンやクセノポンに擬せうとの思いはない、もと私はその人の弟子ではなかつた、けれども、九大の中にいた日本のソクラテスを偲ぶよすがに、その片言隻句を記銘註釈し、以て記念論文集の末座に在らうとおもう。大樹の地面への投影を色なきままに写しとつた

灰色の文章である。敬愛する先生を汚すことを懼れるが、噂の風の漂いに任せず、言論の形に結晶させようとの企てを、先進同僚の諸賢幸いに認められたいと希う。けだし、*read* より *reads* を重んじてこそ、学の正統に立つものではないか。

- (1) ホセア書四・十二
- (2) ホセア書十四・八・杉と訳せるは関根正雄に従う。「旧約における神の独一性」一七頁参照
- (3) 私はここにゴチックの教会を考えている。
- (4) プラトン・パイドロス三〇D、藤沢令夫訳一二二頁参照

二、葉さやぎの影

樹木は夕方その影に疲れた一人を入れて葉さやぐ。芳ぐわしい茶と古陶の渋い光沢。

* * *

研究法について

「先日⁽¹⁾も森君のデカルトを読んでみて、勉強家だなあと思いましたけれどもね、本を縦に読まないですね。⁽²⁾この頃の人は、みんな、本を寝かせて横に読んでる。⁽³⁾あれじゃ、わたしや、わたしゃ、いかんとおもいますよ。」⁽⁴⁾

註釈の次元に降りる必要はないかも知れない。しかし、事柄は明確にしておいた方がよさそうである。

- (1) ソルボンヌ大学東洋語学校講師の森有正、既に東大助教時代からデカルト研究に関しては日本に於ける一方

の旗頭であった。パリに於ける森有正の研究精進の厳しさは私の尊敬する所である。問題の書物は、その「デカルト研究」(一九五〇年、東大出版部)である。

(2)及び(3)は一緒に説明しなくてはならない。縦に読むとは恐らく、与えられた原典の一行々々を、深く掘り下げてその中に没頭すること、同時にそれを通して原典の指す高い意味の次元に登ること、というこの二つの垂直性を巧みにかけているとともに、更に、本を両手で立てて、居ずまいを正して読むことに外ならない。何かその書以外の權威を借りるために、手を空けて原典を倒すこと、何かをその原典に書き加えようという邪念でペンを片手にその書を倒すこと、それらは本を寝かして読むことである。参考文献や辞書を利用するなどの謂ではない。だが、それらの知識を踏まえても、最後は清潔に原典に可能な垂直線を私が辿るものでなければならぬ。本を縦に読まなくてはならない。パリとミュンヘンでは知る人ぞ知る、未だ五十に届かぬ若々しい碩学、私の第一の親友デクの、原典以外のいかなる書物も置かない高潔純粹の氣風があつたシュワーピングの貧しい唯一間の住居を想い出す。

ホメロスに於いては *tyngni* (立てる) こそが *noéa* (創造する) であつたことを、なつかしく思い出す人々もあるうか。

本を横に寝かして読む風潮、即ち水平的考証は、もとよりその類例を往古に求めるのはたやすいが、最近の哲学界では、所謂自称フィロロークに典型化せられる文献学者や、著者その人よりも著書を深く了解しようと自負する解釈学派など、現代の流行病の一つになっている。殊に、徒らに名を立てるを急ぐ徒輩が、大きな正統的な問題を避けて、敢えて些事をあげつらつて学位を得ようとする時、最も好んで採る方法が是れである。

(4)「まるで、こういう末節を知らなくちゃ書いてあることがわからんとでも言うように思っているらしいのが、い
かんのですよ。」日記、断章、に至るまでその全著作を誹破して整合的に解釈しなくてはという尤もらしい横這いの
主張が、実は自らのスケールを小さくして、事象そのものを扱う哲学から離してゆく。森有正の「デカルト研究」は
くだらない意図のない学問性の高い書物であるが、それをしも一語を以て却ける田辺重三の潔癖な思惟とは、それな
らばいかなるものであろうか。

存在について

* * *

「存在と言えば、そこら辺へんの小石だって存在には違いありません。しかし、それよりか、どうも人格ってものの方
が、もっとはつきりした存在だ(1)って事は、こりや確かな気がするんですよ。目に見えないなんて事は、どうでもいい
ことですもんね。(2)だから、神ってものはあって、そりや存在そのものっていうんでしょうか、どう言いましたら、
全く純粋で物質とは全然ちがうものです。(3)」

これは一九五九年秋の西日本哲学会最終日自由をめぐるシウムポジウムに於いて、司会者津田剛の誘いに応じて語
ったもの、証人は多く銘記しているであろう。

(1) 人格を器質的なものの機能に還元してしまうことは、医学者でさえ躊躇する。この一事を誤れば私の人格が毀
損せられるであろうというような考え方を強いられる事態に直面しなかつた人はいないであろう。人格は疑うことな
く存在の一つの単位である。小石をくだき捨てることは惜しまれないが、人格を損うことは慎しまれる。感覚的に触

れえないものの方に高い存在性のあること、むしろ判然とした存在を意識するとは、どういうことであろうか。人間の学問が意識を成立の次元とする限り、この方向が絶対的に動かし難い論理の背骨であるということに外ならない。田辺重三はあの端的な表現の中に、己れの哲学がアリストテレスとデカルトとカントを含んだ広袤の真理に立っていることを暗示する。

(2)も(3)もコンテクストに関する限りは既に(1)の註の中で述べられている。しかし、彼のこれらの表現と聯関して私は敷衍しておきたいことがある。原典を忠実に扱おうとする人文主義の伝統が漸く我が国にも復活しかけ、それを西洋哲学に向けようとしているのは欣ばしいが、哲学は人文主義ヒューマニズムという教育理念の段階に止まるものではない。然るに多くの哲学者を名告る徒輩が、原典の文献学的研究に低迷して哲学史家という本来習作エッセイの次元に座して威張っているのが現状である。而もその根本的方法是、何人が果たして其処までの実力を有っているかどうか私は危ぶむが、結局の処は語感に頼る外ありはしない。それはつまり、感覚を基礎とする考えであり、名を考証と言ひ、実証というも、目に見えるものを実在とする無批判的な思考法にすぎない。それでは形而上学的思索に踏み込みえないのも当然であろう。田辺重三は着実な人文主義ヒューマニズムを蔑むのではない、然し、その平面に安住してもはや事象を見ず、書を世界とする人々を憐んでいる。存在が感覚を拒否するものである以上、考証は決して存在に触れることはできない。本を寝かして読むことは、目に頼ることと同じである。「わたしや、パイディアは嫌いです。」

(3) 　こう言うことも人間の意識の制限を離れては人間として言えることではないという条件が彼の場合にはある。「雨戸を開けたつもりでも、やっぱりさうはいかない。観念論の中に入っているんですよ。ただ、雨戸は開けたんで

すから、見てはいるんです。だからもし物質があるんだというのなら、神もあるんです。全部夢だって言った所で、夢しか見られん者が、それじゃどうして神を否定できますか。さうじゃないでせうか。いけませんか。」これは従って、actus purus と言って一切が片付いたとするやうな生やさしいものではない。

* * *

芸術について

「民芸品は貧乏人の自由です。芸術は金持を否定した上での貧乏人の境地に達してはなりません。⁽¹⁾むづかしいですよ、お金を持っていて、而も離れてしまうこと。これは大変なもんです。だけでも、どうでしょうか、芸術はやっぱ大変なもんじゃありませんか。ちがいますか。」

また或る時、

「どうかすると、こんな宿は困るなんて人がいますね。しかし、わたしや、どうせ宿だから、どうでも住めます。芸術品もわたしの場合、宿屋のようなものです。人生の旅の何かちょっと他処ゆきのような。⁽²⁾だから楽しい。わたしや芸術品を見るときは本当にいいですね。」

また或る時、

「居を移すことのできるものが芸術の鑑賞です。⁽³⁾みんな、本居は別にあるのです。本居を棄てたら、なんもありませんもんね。⁽⁴⁾」

(1) このような会話は大体、骨董が塵にまみれている彼の研究室に於いて行われるとき、まことに趣きがあった。

私は「この金持という言葉は文化と置き換えてもいいですね。」と念を押したら、「そう、さう。」という快適な合槌を得た。民芸に文化が無いことはない、然し、それは精神の表現であるよりは生活の発露であり、智慧よりは土の匂ひであろう。例へば少し場面は違うが、埼玉県馬室村出土の縄文時代の土偶と茨城県下館市出土の弥生時代の人面付土器（何れも東京の国立博物館所蔵）とを比較してみる時、造型の面白さという点では前者が優れているとしても、そこには何か呪術的原始生活の直接反映が感じられるに反して、後者の明快な純粹形式はたとひ実用的であるとは言え、精神の操作が認められ、今日の水準からみても、芸術品の範疇に数えることができようが、その相異は、もし両者が夫々の時代の作品を象徴する代表作と認めてよいとすれば、両者を支える夫々の世界の文化的落差によると言う外ないであろう。即ち、農耕生活の安定に於ける精神の構造的な作用と小規模な狩猟乃至採集生活の原始的衝動の落差である。民芸品の閉鎖的風土的慣性と芸術品の普遍的精神的登高との対比に些か類するものであろう。然し、芸術は生活水準の高度即ち富が可能にする精神の空間のみで成立するものではない。富のない自由、自然の自由、を否定する富の構造、精神の必然、を更に否定した富める自由、精神の自由、を得なくては成立しない。野蠻の自由、文化の必然、を経た文化の自由が芸術を可能にする。田辺重三は宋の白磁も小石原焼の酒盃も鉄翁も賈の大雅も雑然と並べ立てた中に埋もれつつ、たくまらずしてスリオの大芸術、小芸術の区別よりも遙かに本質的な物の見方をしてゐる。

(2) 美は日常の体験に属する平凡なことであろうか。我々の精神が清遊をなし能うよすがとなるもの、芸術品は常に我々の手近に在ることは確かであろう。しかし、常に其処から異常な高揚への出口が開いているということ、そ

これは宗教と似た和光同塵の性格ではあるまいか。向こう側には常識とは隔絶した輝きの次元があるのに、我々の普通の眼には屢々ただの物象としての存在様態を示す。

(3) 芸術美の境地に遊ぶことは、色々の重荷を負って歩む現存在の常態ではない。たまゆらの憩ひとして自己を忘れる恍惚の場処という面は確かにあるであろう。だが、彼に於いては芸術は阿片ではなく、宿屋として象徴せられる。誰にでも作用する麻薬の場合のように、対象が自己を決定するのではない。自分が選んで自分で住み心地を感じるものであろう。芸術品の評価鑑賞は人格の自主的な選びなしには存立しえない。彼は池大雅、浦上玉堂らの作品を多く持って楽しんでるが、中には誰が見てもいかがはしい大雅がある。然し、淡々として「この絵には大雅が出ています。」位ならともかく、「私も鉄齋のように、大分、美しさを見ることができるようになりました。」と言って片方の目を細めて眺め入る姿は、平俗の美術史家の度胆を抜く美の発見者の風格がある。ここでも私はホメロスの用語法を思わずには居られない。*parce* (判定する) は古詩に於いては寧ろ選ぶの意味であった。約束事の尠かった太古の海上の空気に似て、田辺重三の精神は大らかに独りを樂しむのであろう。それこそ人生の芸術である。己れの選びの中に美を判じている。

(4) 芸術品に接していても、それを単なる財貨と見る見方もある。美の次元に自らを置くのでなければ、芸術美の鑑賞は不可能である。嘗て私は美の次元を論じて、それは一つの意識ではあるが、一般の对象的意識が有つ分極的構造契機が止揚せられ、対象的意識はその結果変質せられ、昇華せられて輝き出るところのひとつの光りの地平であると言いたが、恐らく田辺重三も相似た考えをしているのではなからうか。我々が普通に有つ仕事の場を離れて、この

光りに於いて感じる場に居を移すことが、美的態度である。享受は決して受動ではない。我々の哲学者も、憂患からの逃避としての美を憧憬れるらしいことは、「どうもお尻から背中にかけて、やっぱりもやもやとした暗い不安を感じますけれどもね、若い時のように、よう振り返えらないんですよ。だから骨董なんか見て忘れる。わたしや、ひよっとしたら、宗教でもそうですよ。」という言葉からも推定できる。(これは那の津莊で習田達夫、津田剛、根井康雄も聞いていた言葉である。) こういう点は或る意味で甚だ現代的な考え方である。山岳にひそむ隠者は滅ったが自由と救いを美の想念に隠遁して享受する幾人かの賢者を私は知っている。然しながら、(5)現実を棄て切ってしまうのならば、夢遊の人にすぎない。達人は物外の物を見ると言っても、存在者の世界を否定するわけではない。そこは水平的な責務の場処である。ここから逃避する術を心得てはいても、また韜晦の風に身を御してはいても、この煩わしい現実の地位を忘れはしない所に、嚴肅な宗教人としての彼の心底がある。何故ならそれはもと己の拵えたものではなく、原本的な所与に拠り、自己の自由に廃棄抹殺しうる所ではない。かくて自然に垂直的な責務の構造を想うに至るのである。一箇の茶椀と雖も、彼に於いては天地にわたる思索の発条である。天心は書いている、茶道一切の理想は、人生の些事の中にでも偉大を考えるというこの禅の考え方から出たものであると。田辺重三を坐禅せぬ禅者と云い、作法踏まぬ茶人と云うも、誰か異を唱えるであろうか。

* * *

自己について

「どっちの自分が本当かってことになるよ、わからんのですよ。なんか暗い当りまえの自分と、骨董でも見て非常に

純粹になっている明るい自分と、どっちとも言えんのですよ。⁽¹⁾ お酒でも仕事でも何でも夢中になるときは楽しいが、醒めたら途端に何かこういやですもんね。そして淀んでる。しかし、自分とか人生とか、ほんとは動いてるもんじゃないんですか。ちがいますか。」

(1) 言うまでもないが、莊周夢に胡蝶となるの生々とした再生である。意識のもつ本質的な矛盾を見事に言い表わしているものではあるまいか。意識の現実態とは言うまでもなく覚醒して独樂の動いているような澄んだ鋭さで問題に取り組んでいることであろう。しかし、その時、意識は己れを忘れて一つの無意識の状態である。従って、人はそれを却って夢中と言ひ、その活動が終つて独樂の停止した時、即ち、意識の働きの鈍った時、自覚が生じて来て、それを人は覚醒と言うのではないか。だが、己れに成るといふことは、意識の活動によつてのみ完全になる筈のものであり、さうだとすれば、陽光かざろいの美の世界を胡蝶のやうに飛游することであるのかも知れない。 *αἴτιον* (*aition*) *ὁ ἐξ αἴτιου* (*o ex aitiou*) *συναίσθησις* (*synaisithis*) (魂がそれ自身に集中する) といふことは、プラトンに於いて言うまでもなく、 *ἐκ τοῦ αἴτιου* (*ek tou aitiou*) *αἰσθησις* (*aisthesis*) (感覚から身を退くこと) 即ち時間に於いてしか存在しない肉体からの脱出に外ならなかつた。それは平生の在りようからみれば既に夢としか思えない。田辺重三の自意識への懷疑はデカルトの如く、自己の存在を確保するための方法ではなく、確保せられている自己の真相を明らかにしたい欲求が、方法的に解決できないという事態を直観したことの表明であろうか。哲学を以て最高の自覚となす池上鍊三に対しても、人間を以て自覚的存在となすハイデッガーに対しても、否、自覚を尊ぶ全西洋哲学の伝統に対しても、彼は莊周の古い疑いを提げて立っている権利を有っているらしい。だが、彼は賢者であつて、そのような企てを以て自らを縛めようとはしな

い。ただ問いかけることを止めない、「昨日の私と今日の私とどうして同じ人だと言うんですか。記憶だと言うんですかね。わたしは自分の記憶にはさっぱり自信がないんですよ。」

三

大人物は記憶などしない (Ὁὐ γὰρ μὲν ἀνοήτως τῷ ἀνοήτῳ ἔστιν ἀνοήτως) とアリストテレスは道破しているから、あの時ああ言い、この時こう言った大人物その人が自らの連続を記憶しないのも当然であろうか。だが、私は彼の忘却性を当てにしてミユトスを書いたのではない。これらの言葉は田辺重三の埃の室で茶の馳走にあずかった人なら、その信憑性を立証するに躊躇しないであろう。もし、彼らも幸いに記憶を有するならば。実際、アリストテレスの言葉などはどうでもよい。無理をしない記憶は探究の緒にさえなるであろう。「火は生きています。どうして死んだ現象だと言うんですか。」焚火を見つめながらこう言った田辺重三の言葉の鮮かな印象の記憶が、藤沢令夫のプシケ―研究という本号の老大な規模の論文の刺戟でもあったし、森田良紀の善や真理に就いてという大胆な問題設定に於ける細心の歩みにも、「善とか悪とかありますけれど、どっちが本ものかちゃんと考えたことがありますか。」というような彼の言葉の記憶と関わりがないこともあるまい。私もまた自己の記憶を忠実に辿り、田辺重三に從って考えながらこの文章を書く時、実に多くの事を学んだと思う。型を成してはいないとの批難はあろうが、私はこの文章を私の哲学的論文の一つに数えることをためらわない。それは型に執してはいなかった一人の教授の思索の影には、いくらかかふさわしいものでもあろう。日記にはまだ数多くの彼の言葉を拾うことができる。そして、この論文自体も本来

未完のままである。しかし、私は再びこのような形で、この人について書くことはしないであろう。樹が移植せられた後、その影はもはやこの園の地面の何処にも求められはしない。(尚、この文章の仮名遣いは、勝手に新仮名遣いという私の蔑むものに変えられてしまった。)